

(二) 中国の視点から

東洋学園大学教授

朱 建 栄

黒柳

次に、東洋学園大学の朱先生から、中国の視点に焦点を当てながら、この朝鮮半島情勢についてのお話を頂戴します。三十分以内でお願いしたいと思います。

朱

議長、ありがとうございます。

まず冒頭に、大東文化大学そして黒柳先生からこのような素晴らしいシンポジウムにお招きいただいたことに、感謝の意を申し上げます。

私に与えられたテーマは、中国の視点ということですが、もちろん私は一研究者でしかなく、中国政府当局の視点を代弁することはできませんし、当局も、詳しく立場の表明を行ってはいません。私自身が、中国のいろいろな研究者と、あるいは外交担当の関係者と会って得た資料、示唆から、このテーマについて話をさせていただきたいと思えます。

私自身の話は主に三つです。最初に、最近の朝鮮半島の情勢をめぐる一連の動きに対する中国の受けとめ方、中国はどう見ているかということについてです。二つ目ですけれども、朝鮮半島、南北朝鮮に対して、中国はどのようにか

かわっているのかです。そして最後に、これに基づいて、中国の朝鮮半島政策、外交の目標は何なのかということを考えて、まとめてみたいと思います。

まず最初の点ですけれども、二〇一二年、朝鮮半島で、ドラマチックな、ほとんどの外部の人が予想できなかったことが起きています。その中でも、もちろん特にこの六月にピョンヤンで行われた南北朝鮮の首脳会談が、全世界で注目されたわけですが、では、この南北首脳会談について中国はどう見ているかということ。中国の研究者の主な見解を紹介しますと、それはやはり南北朝鮮それぞれの内部、そして、対外的な必要性から由来した、これが主要原因ではないかという見方です。

もちろん私たちは、もっと巨視的に、九〇年代の初めにヨーロッパで始まった冷戦終結の波が、いよいよ東アジアに押し寄せてきたという大きな背景を見ることもできますが、でも、今回の首脳会談に至らした直接の原因は、やはり双方の内部要因ではないでしょうか。具体的に見ますと、北朝鮮側は、まず国内政治において、金正日総書記が、どのようにそのお父さんの金日成主席からの政権委譲を受けて、自分の時代、指導力を確保していくのか、確立していくのか、それが重要な課題だったといえます。その中で、外部からは特に、内部の引き締めとかそういうような側面に目が奪われがちですけれども、多分、どこの国の指導者でも、経済・軍事・外交というような政策の面で輝かしい何かをして、国内の指導の正当性を確保するというようなことを考慮すると考えられます。

ここまでの北朝鮮の内部では、金日成、金正日ら指導者が、歴史上いかにこの国づくり、この国の発展に貢献したのか、いろいろな教育が行われた部分もありますが、同時に、この小さい北朝鮮が自らの力だけで、アメリカ、韓国などと五分五分に渡り合って独自の体制を守っていると、国民に当然アピールするものになりますし、この間打ち上げた人工衛星、最後に宇宙まで届いたかどうかは確認されていませんけれども、それもやはり国内での指導部の能力を示す

というようなねらいがあつたと考えられます。

ただ、最近になって、軍事力、そして人工衛星あるいは核開発などによつて、その指導力を国内にアピールするこゝとに限界が来たとも言えます。これ以上すると、対米関係などでさらに緊張度を増し、その代価が払えないというようなところまで来たとも考えられます。そうすると、やはり次には、特に得意とする政治、外交能力をもつて、アメリカ、中国、そして南の韓国と、華麗な外交を展開することによつて、自分の指導者、指導部のそのような能力を示すというようなところにシフトした一面もあるのではないかと考えられます。

金大中大統領がピョンヤンに行ったことが、後に北の内部で、南が白旗を立ててやってきたというような言い方があつたようです。私は、それは南を悪意で見ているというふうには解釈いたしません。これまでの内部で、南を相当非難、批判してきたことと、今、金大中大統領がピョンヤンにやってきたこととの間につじつまを持たせるための、そのような内部向けの意味が大きかつたのではないかと思ひます。同時に、北朝鮮側は、経済、外交の面で局面打開を考えなければならぬ、そのような緊迫性にも迫られていると言ひます。

中国と北朝鮮とは、かつて同盟友好関係もあつて、現在でも北と最も密接な交流をしていますけれども、それゆゑ北朝鮮の経済の苦境をもつとも理解し、認識していると言ひます。北側は、もともと石油の資源がほとんどなく、旧ソ連などから輸入しなければならなかつたのですが、旧ソ連の崩壊で、そのような供給が得られなくなりました。今、北朝鮮の多くの地方都市では、バス、トラックなどでは、油を燃やすのではなく、上に大きいガスの袋を積んで、石炭で燃やしたそのガスを使って動力とするというようなこともよくあると、中国の研究者から聞かれました。また、どうもオイルを節約するために、パイロットが数カ月に一度しか飛行機を操縦して空を飛べないというような話も聞きました。こうして、特に食糧事情が重要な一つの問題だつたわけです。北朝鮮の人口に対し、最低毎年四百五十万トン以上

の食糧が必要不可欠ですけれども、どうも通常の年では三百五十万トン、多くとも四百万トンしかとれません。凶作の年になるとなおさら、二百万トン以上足りないというようになります。そうすると、やはり外交を展開して、食糧確保のために努力するという必要性もあつたわけです。

これまで、外部から北朝鮮にいろいろな食糧援助が行われてきましたけれども、中国から、公にはあまり宣伝はしていませんけれども、実際に中央政府の支援分と、また、北朝鮮に隣接する中国の東北各地域とのバーター貿易による北への食糧輸送を含めると、アメリカの研究者の見積りでは、毎年百五十万トン以上の食糧が、中国から北に行つていくというような状況の中で、北は、経済、そして外交孤立を打開するために、やはり韓国との関係を相当思い切つて打開に向かわないとできないほどの決意の理由もわかるような気がすると、中国の研究者は言っています。

では、韓国側はどうなのかということですが、それについての中国の研究はそれほど十分ではありません。ただ、中国の東北部の幾つかの研究所で韓国との交流が拡大しており、それによりますと、韓国内部では、金大中大統領は、少数派に属する全羅道に属するものですが、これからの選挙、政治の主導権を確保するためにも、やはり北との関係打開ということによってその影響力を確保していききたいという考慮があるのではないとも言われています。

また、朝鮮民族は、南も北も、統一というものを最大の民族の使命としてともに掲げていますので、その中で、やはりどの大統領も、自分の在任中にその打開に貢献できるか、そのことによって、歴史に名前を残す。そして、実際に自分の国が相手との関係で一定の優位に立つとするような、内在的必要性もあつたと考えられます。

もちろんほかに、特に金大中大統領個人の理想主義、朝鮮情勢をどのように、これまでの固定観念にとらわれずに新しいものを求めていくかと、そのような理想、忍耐強い努力、そしてその太陽政策、それに負うところもかなり大きかつたのではないかと言われます。

では、今回の会談の結果をどう見るかですけれども、一般的な見解は中国もほとんど共有していますけれども、今回の会談そのものは大成功であり、今後の朝鮮半島情勢の発展にとって大きな意味がある、プラスの積極的な意味があるという見方です。具体的に言いますと、朝鮮半島での緊張緩和、南北間の対話と経済協力、さらに、東アジア地域全体の緊張緩和と信頼醸成を促進していく重要な意味がある。そして、このような流れは、恐らく今後、金大中大統領の任期が終了後でも、後退はできないのだろうと見られています。

もちろん、大統領の変化で、特にライバルの地域からの大統領になりますと、一定の揺れはあると考えられますけれども、しかし、ここまで、そしてこれからさらに南北の交流、対話を定期化、向上化させていくと、それは、どの政権になってもこの大きい方向そのものはもう変えられないだろうと見られています。

ただ、プラスの評価が多いのですけれども、中国の学者・研究者は、南北朝鮮の関係は、これによって一気に早期の統一とか、ドラマチックな変化はないのではないかと冷静な見方も同時にしています。何ととっても、これまで長期にわたって互いに猜疑心、信頼しない敵視の関係が続いてきました。同時に、今回の首脳会談では、わりにやりやすい経済交流、いろいろな人的交流について話をし、特に難しい軍事対立の解消などを避けて触れなかったけれども、これからの交流、交渉で、そのような根幹にかかわる軍備の削減、在韓米軍などの問題になると、そんなに簡単にはいかない。

さらに、北朝鮮のこれまで外部の情報をシャットアウトしてきた鎖国政策も、この交流の中で内部に一定の動揺をもたらすというようなことが予想され、北も、いきなり早く国を開放するという事になかなか踏み切れないわけですね。

午前、ある学生さんから、そのような交流の拡大によって、北朝鮮の体制が一気に崩壊する可能性があるのではない

いかというご質問もありましたが、そのような心配が北の内部にあるのも自然だと考えられます。中国も全く同じでした。八〇年代の初めに改革開放政策を始めたときに、これによって我々の政権が崩壊してしまうという危惧もありました。しかし、結果的に見て、段階的な開放によって、内部の国民も適応性を徐々に身につけることによって、さらにその段階に国民の生活が向上し、これまでより経済、生活状況が著しく変化したというようなことがあれば、少なくともいきなり政権崩壊にはならないということが、中国で示されています。

そういう意味で北朝鮮は、内部の改革も対外開放も徐々に慎重に進める。しかし、それをもう一回戻る、完全な鎖国に戻るということはもうあり得ないでしょう。それは、内部の経済的必要性からもそうなっています。

漸進的な開放によって、ソフトランディングするということという可能性も十分にあると考えられます。もちろん、その間に中国にもあつたように、内部の指導者、学者の間でいろいろな思想的動揺ないし理論論争、権力闘争がある程度起きることもあり得るのですが、それは、注意深く見守っていく必要があるのではないかと思えます。

次は、視点を少し別の問題に移しますけれども、米朝交渉及び日朝交渉について、中国はどう見ているかということです。中国の外交の基本的スタンス、後でもまた触れますけれども、北朝鮮という国がもし自分の力で存続、生き残りができれば、これにプラスになるようなどんな動きでも支持する、それが中国の基本的な姿勢だと思います。そういう意味で、米朝交渉、日朝交渉、北朝鮮と、東南アジアや、ヨーロッパ、オセアニア諸国との関係の打開を歓迎する、これは多分本物だと思います。

中国側の具体的な計算と読みとしては、第一に、中国は、北朝鮮が対外開放をすることによって、自力でこの体制、この国が存続できるようになる。中国にとって、このような友好国が隣にあるということは、当然安心感もありますので、外部からの輸血に頼るのではなく、対外開放を通して自力によってこの体制が存続、さらに安定していくというこ

とを望んでいますので、北朝鮮の自助努力、すなわち国内改革・開放による経済発展に対し当然歓迎すると考えられます。

同時に、中国は、これまであまり公には言っていないけれども、北朝鮮へ相当の経済支援をしてきました。しかし、中国自身も途上国であり、国内で対外的支援をする、できる範囲がかなり限定されています。そういう意味で、北が、アメリカ・日本・韓国及びほかの国と、そのような外国との関係の打開によって、北朝鮮が諸外国との交流を通じて、いろいろの支援、経済協力を取りつけられる。これは中国にとっても負担を軽減することになるという見方も中国の中にあるようです。

具体的に、アメリカ・日本の、北朝鮮との交渉について言えば、まずアメリカについても、九〇年代半ばごろまで、北朝鮮が中国よりもつばら目をアメリカに向けて、米朝交渉にすごく熱心だった時期がありました。その時期に、中国側に完全に嫉妬心がなかったのか。私はわかりませんが、ただ、少なくとも最近になって、中国は冷静に米朝交渉を見て、基本的にこれはいいことで、中国としても支持すべきだという認識をもっています。そのために北京を米朝交渉の舞台として提供したりするなど協力もしています。中国の基本的な認識として、アメリカは北朝鮮との交渉を通じて、北朝鮮の破壊兵器の開発などを阻止するという具体的な目標があり、また東アジアでアメリカの主導による秩序の維持、その主導権を確保するというような狙いもあるとされています。ただ、北朝鮮の体制、その置かれた状況から見て、アメリカがいろいろなイニシアティブを取ろうとしますが、アメリカ内部にもいろいろな意見の相違がありますし、アメリカの東アジアでの軍事戦略も、その優位性の温存、そして、それを維持するためにはどこかで敵を見出さないといけないというところから見てその矛盾も残っていますので、アメリカと北朝鮮との関係の改善に限界がある、そういうような見方が一般的です。

一方、日朝交渉についてですが、この間、中国の朱鎔基首相が訪日した際、日朝交渉の進展を望む、我々もできるだけのことを協力するというふうに表明しました。ただ、日本が最近、北朝鮮との交渉で新聞をにぎわわせているのは特に拉致問題ですね。拉致問題は、民主主義国家としてこれを見逃すことはできない。そのことはよくわかっています。人道という面から見ても、その問題の解明は、当然外交交渉のプロセスで解決されるべきですけれども、外交的に、第三国の視点から見れば、日朝関係のいまだに正常化していない原点は、日本が朝鮮半島を三十六年間、植民地支配したこと、そのことに対して、いまだに終止符が打たれていないことです。

このような両国関係の原点の問題の解決を脇に置いて、ただ拉致問題だけを持ち出して、それを関係改善の先決条件とするというような動きも一部にはあります。けれども、それは外部から見れば、北の経済困難という弱みをつけ込んでのことではないか。あるいは、やはり外交関係の最も重要な部分を見逃して、日本国内で特に重視される拉致問題だけを中心にするという国際的に見てほとんど通用しないアプローチになっているのではないかという見方もあります。もちろん、拉致問題などを解決しなくていいということではありません。それは、やはり日朝関係の原点である過去の終結ということとの関係で見れば、少なくとも外交交渉の中でその原点の問題、それは優先的に考えないといけません。その過程で、拉致の問題を解決していくというような手法が求められているのではないかと思えます。

二番目に、中国の朝鮮半島に対するかかわり方はどうなのかということですが、まず、北朝鮮との関係です。五〇年代の朝鮮戦争で、中朝関係は、一種の血で結ばれた同盟関係ができあがりしました。

しかし、八〇年代以降、大きな揺れを経験してきました。それまでの友好関係から、中国は徐々に改革開放政策、それは北から見れば資本主義に歩み寄るような政策をとることへの不信感、また、中国と韓国との交流の拡大への反発それによって、八〇年代後半には関係が徐々に冷却化し、特に九二年の中韓国交樹立によって、中朝関係が相当悪くな

りました。九三年の北朝鮮のNPT脱退も、中国に事前に知らせることなく一方的に発表したもので、中国も相当慌てました。その後、試行錯誤を経て、去年の段階でいよいよ修復の方向に向かいました。何といたってもやはり中朝が助け合おう、協力し合うということが両国にとって最大の共通利益になるということが、中国だけでなく北朝鮮でも認識された結果だと言えます。

ただ、これから再び特殊な友好関係に戻るかといいますが、私は、かつての特殊な友好関係の部分をある程度守りながら、徐々に普通の関係の部分拡大していくというのが方向ではないかと思えます。この十月、中・下旬、アメリカのオルブライト國務長官がピョンヤンを訪れたとき、ちょうど中国の遲浩田国防部長もピョンヤンを訪れていました。その訪問は、中国の朝鮮戦争参戦の五十周年の記念行事に出席するためなのですが、その数日間、北の外交の対応はすべてオルブライト國務長官をめぐって行われ、それに対し、中国の中のインターネットなどでは、中国の国防部長が相当冷遇されたのではないかというような反発もありました。もちろん、その直後の中国参戦記念集会に金正日総書記が出席し、相当の評価、替辞を送ったわけで、特に外交の問題にはならなかったと言えるのですが、両国関係が、これからも特殊と普通、この両側面を抱えながら新しい関係を模索していくのだろうと思われまます。

中国の北朝鮮への影響力をどう見るかということですが、日本などでも、中国の影響力についての評価に意見が分かれていますけれども、中国自身は影響力はないとずっと言い切ってきています。客観的に見ますと、限定的な影響力があることは間違いないでしょう。ただ、中国は、そのような影響力に関して、自分から北朝鮮に対しこれをやれ、これをやめろというような影響力は、中国自身も控えていますし、ほとんどそのような影響力はないと思います。ただ、中国は何も言わなくても、すぐ隣にあって、北朝鮮と切っても切れないいろいろな関係もあって、北朝鮮の外交もあるいはほかの関係諸国も、諸問題において中国の存在利益を無視できないというようなところに、中国の重みがあるので

はないかと思われず。

そのような状況の中で、中国の北朝鮮との関係においては、直接北に対してプレッシャーをかけない、そして外部に対しては、北の代弁者を務めず仲介者に徹するという立場を貫いていると言えます。中国から見れば、プライドが高い朝鮮民族に外圧を加えると逆効果であり、かえって事をこじらせてしまう。そして、中国が北朝鮮を代表できるようなことを言ってしまうと、もちろん北からも反発が生まれ、また同時にアメリカなど外部が、北へのプレッシャーを中国に向けてくる恐れがあると中国で考えられています。

では、中韓関係はどうかといいますと、ここ数年、関係は、経済・文化領域から政治・安保面に急速に拡大しています。中国と韓国の国防大臣も相互訪問しています。金大中大統領は、TMDの開発・配備に参加しないと声明しています。TMDの開発は特に中国では、自分に向けられているのではないかとそういうふうには危惧していますので、韓国のその態度表明が両国関係のかなりの進展を示していると言えます。

同時に、最近の金大中大統領の理想主義外交に対し、中国は相当高く評価しています。金大中大統領の新理想主義外交は、北朝鮮との関係だけでなく、対日・対中にもあらわれています。日本に対し、歴史問題は忘れることはできませんけれども、未来志向の形で解決を求めているという、これまでの韓国の歴代の政権と違うアプローチを始めています。中国とも、やはりそのような交流をしています。そういう意味で、金大中大統領がノーベル平和賞にふさわしいという声は中国で早くから出ていました。

では、韓国との関係の強化に関して中国は何をねらっているかといいますと、恐らく、南と北の双方とのパイプを確保することによって、その影響力、中国のプレゼンスそのものを示すという意味があるとともに、朝鮮半島で今後、どんな形にしろその統一に向かう機運が高まれば、それは朝鮮民族自身によるイニシアティブ、それを促進したいとい

うような意味で、韓国との関係を拡大するというような考えがあるのではないかと思えます。

これを踏まえて、最後に、中国の朝鮮半島外交の目標は何なのかということですが、第一、中国自身の経済発展をめぐる周辺環境の安定を確保する一環として、半島での戦争・衝突の発生をぜひとも阻止することです。中国は今、朝鮮半島のいかなる国が大規模な破壊兵器を所有・開発することに反対だと表明しています。

二番。友好国、北朝鮮の存続と、その経済の建て直しを図るため、中国版の改革・開放政策を取り入れるよう、ピョンヤンに働きかけ、同時に北朝鮮の対外開放の努力を支持するということです。それを通じて、北朝鮮の存続、発展ということを目指すということですが。

三番。半島での南北対話、協力、自主的な平和統一に向かう動きを支持することによって、アメリカの軍事的プレッスンが、北朝鮮、中国の国境線に拡大されるということを避けたいというようなねらいもあると思います。本当に統一に向かう場合に、在韓米軍の存在について、中国はどう見るかということですが、これまで中国は、もうほぼ北朝鮮の立場に同調して、その撤収を支持すると言ってきたけれども、最近、内部のシミュレーション、分析で、やはり一定の変化もあるように感じられます。

アメリカと中国の間、既に今でも互いに警戒するところはあるのですが、これまで北朝鮮、朝鮮半島という緩衝地域によって、互いに直接対立を避けるといようなクッションが機能していたといえます。もし半島が、統一する過程で米軍が撤退させられることになれば結局アメリカが中国に敵意をストレートに向けてくる、警戒心を強めてくる、米中関係がさらに緊張する恐れがあるのではないかという見方があります。

また、恐らく米軍撤退を余儀なくされたら、アメリカの中で、必ずだれが韓国を失ったのかというような議論になりますので、その補償で、結局アメリカが台湾にもっと軍事的支援を強化するということにもなりかねないというよう

な見方もあります。そういう意味で今の中国は、在韓米軍の存在に対して現実に応じて徐々に考えていこうという姿勢で一定の減少は支持しますけれども、完全な撤退はどうかは、コメントを避けるというような対応をしているように見えます。

時間を超過しましたが、私の発表はこれで終わらせていただきます。ありがとうございました。（拍手）

黒柳

ありがとうございました。中国の立場から、あるいは中国の視点を反映しながら、朝鮮半島情勢について論じていただきました。